
泡になっても傍にいて

シズカンナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡になっても傍にいて

【Nコード】

N1848T

【作者名】

シズカンナ

【あらすじ】

異世界とやらに飛ばされてしまった私は、愛しい王子様を見つけた。でも貴方はこの世界のお姫様と幸せになるべき人。だったら私にできることは、泡になって消えてあげることだけだ。（トリップ・異世界・切なめ？・甘め？）

1、決意をした彼女のこと（前書き）

今度こそ、ちゃんと投稿できました。

ご迷惑をおかけしまして、申し訳ありませんでした。

1、決意をした彼女のこと

いつからか、王子様が欲しかった。

でも、特別に可愛いわけでも賢いわけでもなかった私はただ漠然と王子様を思うだけの才能しかなかった。

だから、もしも私がお姫様になれたとしたら

最後は選ばれず泡になった人魚姫だろうと思っていた。

そんな私が、異世界とやらの飛ばされてしまった。

この世界で「愛しい」と思える王子様を見つけてしまった。だけど、その人はすでに誰かのものだと決まっていた。

なんて、あまりにも自分にお似合いすぎて笑ってしまった。最後まで人魚姫でしかなかった私。

だったら、泡になるときは笑っていてやろう。

「マナ、最近元気ないね」

そう言って控えめに探りを入れながら微笑む男はジークフリート。略してジーク。

ジークは金髪碧眼・容姿端麗とそろった、正真正銘のこの国の王子だ。そして、もうすぐ王様になる。

「貴方の戴冠式がもうすぐあるから疲れているんです。一応、私これでもお針子の一人なんですからね」

そう、これは嘘じゃない。たいした取柄もない私ができることは、とても限られている。

この世界の文字がわからない私にできるのは簡単なことだけ。中でも裁縫は元の世界と同じやり方できる、数すくない私の仕事だ。針子とメイドの兼業をして、私はこの城での毎日をすごしている。それは、ジークだって知っていることだ。

「…そうか、なら良いのだけど」

それでも、まだ疑わしげな瞳を向けるジーク。もしかして、私の計画がばれつつあるのだろうか。

だとしたら、困ったことになってしまふ。どうしよう。

少し探りでもいれてみようか。

「どうしたの？何か悩みがあるならば、話くらい聞いわよ」

「ありがとう、マナに心配してもらえて嬉しい」

そう言っただけジークは嬉しそうに笑うものだから、私の心拍数は一気に跳ね上がる。

恐ろしい。このままでは私は死んでしまふ。

ああ、でも、こんな死に方は幸せかもしれない。

「俺はそろそろ行くね。マナこそ、何かあったら教えて」

まぶしい笑顔を振りまいて、執務室に帰っていった王子様。

罪作りの笑顔に殺されそうになりながら、あと何回それを見ることができるのだろうかと考えて胸が痛くなった。

週末の残業帰りの深夜。

道の途中にあった水溜りを踏んだのが全ての始まりだった。

ウォーターライダーのようなトンネルを抜けて落ちた世界はゼ
ガール。唯一の神がすべる異世界。

その中でも一番大きく繁栄している国ラカの城の噴水に落ちた私
は、最初にジークに出会った。

正確には、噴水の深みにはまっていたジークを助けたのだ。
城の噴水は細工が細かく、その隙間に足を挟んで溺れかけていた
のがジークだった。

目の前にもがき苦しんでいる人が居たら助けない道理などない。
私は、なんとかジークの足を引っ張って水面まであがった。
そして、そこから私の新しい生活が始まったのだ。

人目を気にしながら暗い廊下を抜けて、怪しさが漂う扉を開けれ
ば、更に怪しげな機械が並んだ部屋にたどり着く。

背を向けたまま一心に机に向かう人物に声をかければ、とても嫌
な顔をしながらこちらをむいた。

「おそい。時間はとても重要な要素だ。一秒でも遅れれば、」

「はいはい、上手いかないんですよ。分かっているわよ。仕方な
いでしょ、王子様に声かけられたんだから。」

王子という言葉にビクツと反応を示した男は、仕方ないともい
うかのように視線をそらした。

目の前の男は、宮廷魔道士長などというものについているが、実
際はただの王子狂信者である。

濃紺の艶々ストレートが似合う優男であるように見えるが、気性は荒く王子以外の人間は全てゴミだと思っている唯我独尊野郎なのだ。

「それで、ノア様、どこまですみましたか」

「うるさい名前で呼ぶな。どこまで？バカか全て終わっているにきまっている」

目の前に突きつけられた魔方陣は、先日見たときよりもより難解で複雑な形になっていた。これを完成というのならば、そうなのだろう。

「わー、すごいですね。一昨日までは、できるかどうか……って自信なさそうだったのに。一番偉い魔道士の称号も伊達ではないのですね」

そう言つてニツコリと微笑めば、机の横に立てかけられていた杖で殴られた。

酷い、幾ら嫌味を言ったからって暴力に訴えるなんて子どもすぎる。言葉には言葉で答えるのがルールだろう。

「お前は本当にイライラさせるやつだな。その減らず口を一度でも王子様に叩いてみる。私がお前の極刑を申し出てやる」

「できるがわけないでしょう。そんなこと言ったら、困ったような微笑で「俺、何か悪いことでもしたかな？」って王子様らしい台詞を吐かれて、私が悶え苦しむだけ」

王子の困ったような笑みでも想像したのだろう。うつとりと遠くを見つめる気持ち悪い魔道士。それを放って置いて私は部屋の装置を点検する。

ここまで来るのに一年もかかった。

性悪でも最高の協力者を得て、最高の装置を揃えて、一番の好機を伺う。それらをこなすのは私にとって一種の義務のようなものになった。

そして、ある意味救いにもなっていた。

初めにこの世界の住人として接したのがジークであった。彼はとても優しく、いきなり落ちてきた私にも親身に接してくれた。

偉い人だとは思えないほど身近な存在として私のそばに居てくれた人。そんな人を好きにならないはずがなかった。

新しい世界、不安な毎日を送る中でジークだけが私にとって癒しであり救いであった。

元の世界で恋をしたし、恋人がいたこともあった。だけど、ジークに出会って、その恋は違っていたのだと気づいた。

相手のためならば自分も厭わない。そんな気持ちは、元の世界に居たときには感じなかったから。

彼の役に立ちたい。彼が笑っていられるならば何だってできる。だから、どうか傍に居させて。

そう思っ、城での仕事を志願した。慣れない裁縫も、メイドとしての作法も頑張っ、て覚えた。

どうしても、この世界の言葉だけは書くことも読むこともできなかった。それでも、読み書き以外のことはできるように精一杯の勉強をした。

そうして、何とかこの世界に慣れてきた一年目の終わり頃ジークの結婚が正式なものになった。

「おい、本当に戻るのか」

無表情で確認するかのように聞いてくるノア様。

当たり前だ、そうでなければこの一年、なんのために頑張ってきたというのだ。

力いっぱい頷こうとして、ジークとの思い出がよぎっていった。

楽しかった、嬉しかった、幸せだった。

優しい人だけど、それだけじゃない。ちゃんと自分の意志をもつ強い人。

誰もが、彼の幸せを願ってやまない。神さまに愛された人。

でも私は、ここにいたら彼の幸せを願えなくなる。嫉妬とかの醜いドロドロの感情で、彼の幸せを願えなくなる。

優しい彼の傍にいる人間が、彼の幸せを願えないなんて。そんなの、たとえ自分自身であつても許せない。

25年生きてきて、初めての気持ちだった。こんなに誰かを思えるなんて知らなかった。

だから、この思いは大切に守りたい、と思う。

「戻らなくちゃ、いけないの」

ここに留まって、いつか彼の幸せを願えなくなる前に、私は元の世界に戻る。

この恋が綺麗な思いのまま、王子様にさよならをしよう。

「そうか…わかった」

どこか寂しげな表情のノア様。どうしたのだろう。もしかして、寂しいとか!?

「ノア様、私が居なくなつて寂しいのですか？」

「バカか、そんなわけないだろう。ただ、」

ノア様が喋ろうとすると、いきなり扉が蹴破やれた。

突然の事に動けない私。武装した兵士に取り囲まれ、引きずられていく私。

え？

なんで、

どうして。

「マナー！」とノア様の声が聞こえる。

焦ったような、怒ったような声。そんな声を初めて聞いたからも
っと聞いてみたいな、なんて思った。

だけど、意識が遠のいていつてすぐに聞こえなくなった。

2、美しい月の夜のこと

美しい月の夜。私は、テラスに出て夜風にあたっていた。

城での仕事も少しずつ慣れてきて、こんな時間に出歩く余裕もできたのだ。

城仕えのものが住む寮のようなものは城の裏手にあり、テラスからは小さく城が見える。

あの城にジークが居ると思うと、なんだか目が離せなくなってしまふ。

「あいたいなあ…」

「だれに？」

優しい声にびっくりしてテラスから身を乗り出せば、しーっと人差し指を口に当てたジークが立っていた。

「なん、で？」

「会いたくなつたから」

そう言つてひよいひよいと柱を伝つてテラスまで登ってきたジーク。

いつもと違う質素な服を着ているところを見ると、お忍びで城を出たのだろう。

幾ら質素な服を着ても、漂う気品とか存在感は消すことなどできない。何を着ても彼は、王子様なのだ。

「誰に会いに来たの？メイド長のサリー様？それと執事統括のオリバー様？どちらにしても、お二人はお城にお住みになっているはずだから…えっと他には」

キョトンとした顔のジーク。あれ？私になにか変なことを言ったかしら。

だって、そうじゃなきゃ、なにかあっただろうか。私だけ知らされていない何か……。グルグルと考えていると、然笑いだすジーク。

「なんで、笑うの！？」

「いや、相変わらずだなあと思って。うん、」

言いながら、私の頭をぐしゃぐしゃと撫で回す。お風呂上りで良かった。今ならば、癖毛の私の髪もさわり心地は良いはずだ。

「俺が会いたかったのはマナだよ。どう、仕事はなれた？」

「ああ、うん。こっちにきて半年経ったから、ちよつとだけ余裕もでてきたよ。こんな時間に出歩くくらいには、ね。」

私に会いたかった、なんて。ちよつと照れてしまう。ジークはいつも、こっちが恥ずかしくなってしまう台詞をはく。その度に私はドキドキして、勘違いしそうになる。

「そうか、よかった」

嬉しそうに微笑むジーク。私はその笑顔から目を逸らすことができなかった。本当に幸せそうに笑うその人を見ると、私もなんだか幸せな気持ちになれるから。

愛しいという気持ちは、この人を見ていて初めて知った気持ちだ。無性にこの人のためになることがたくて、でもドキドキして上手くできない。落ち着かなくて、だけどいつもホワホワと温かい。

なんか情緒不安定だけど、とても満たされてしまっている。

「ありがとうございます、王子様。」

「その呼び方、嫌だな。ちゃんと名前で、ジークって呼んで。」

ムツとした顔をされも、そんな風に呼ぶのは久しぶりすぎてちよつと緊張してしまう。

仕事中は、いつも王子様って呼び方で統一されていて、ジークなんて気楽に呼べたのはこの世界に来て最初の一週間くらいだ。

本当は話す言葉も、こんなふうに気楽なものじゃないのだろう。

「う、なんか、慣れない、のですが…」

「その丁寧な言葉も嫌い。さっきみたいに普通にして。仕事中は別に仕方ないけど、今は」

切なそうに月を見上げたジーク。一枚の絵画みたいな光景に私はホウっとため息をついてしまった。

なんて、絵になるのだろうか。月に向けた碧い瞳が切なげで、月に嫉妬してしまいそうになる、なんて思っていたら

「俺と君、たった二人だけなのだから」

その瞳が突然こつちを向いてびっくりした。

きゃあ、威力が強すぎます！！まともに見られない。

あ、ちょ、近づいてこないででででで。

「ねえ、名前を呼んで」

そっと肩をつかまれて、耳元で囁かれれば、私はすぐに降参してしまう。大好きな彼の願いを聞けないはずがないのだ。

私の一言で彼が喜ぶのならば幾らでも、言葉をつむごう。

「じ、じーク」

「もう一回」

「ジーク」

「なあに、マナ」

心底嬉しそうな声に、私は泣きそうになってしまった。こうやって、優しくされればされるほど、勘違いしてしまいそうになる自分が嫌だ。

私と同じようにジークも私を好きなんじゃないかって。だけど、それは絶対じゃないこと。

震える手でジークの胸を押して、必死に怒ったような顔をつくる。

大丈夫、声は震えない。

「駄目だよ、こんなところ誰かに見られたら困るでしょう」

「え、別に大丈夫だよ」

なんてことはないという風に言われれば、この程度の触れあいにはジークにとっては大したことはないと思いきらされる。

でも、私にとっては泣きそうなほど嬉しくて苦しいことだ。

「ぜんぜん、大丈夫じゃないわ！！私が、色々と言われちゃうのだから。それに、その、セリナ様が勘違いしちゃったら、可哀想だよ……」

ジークには婚約中の相手が居る。宰相であるオルガ様の愛娘であるセリナ様。

美しい白銀の髪に、ジークと同じ碧い瞳。二人が並ぶと御伽噺のワンシーンのようだった。

私みたいに、平凡な顔に黒い髪と瞳じゃあ、やっぱりジークのとなりに並ぶのはおかしい。ちゃんと、お似合いの二人はいるのだ。

「ああ、セリナは平気だよ。気にすることなんてない」

優しい声。頭をまた撫でられて、私は泣きそうだった。
「というか、泣いてしまっていた。」

「どうしたの、マナ」

いきなり泣き出した私に焦るジーク。いけないと思いながらも私の涙はとまらない。

ジークが「大丈夫」とか「平気」とか言うたびに、私の事なんてなんとも思っていないって言われるようで辛くなる。

私なんて、初めからイレギュラーな存在で、彼を煩わすほどのものでない。そんなこと知っていた。

でも、彼のくれる優しい時間は私を贅沢でわがままにさせてしまった。

もつと、彼のそばにいたい。

私だけの王子様になって欲しい。

彼が、欲しい。

嗚咽を漏らし、ジークの肩に額をこすりつけて泣く私。

頭を撫でてくれる手は何処までも優しく、涙は止まりそうもなかった。

3、覚悟をきめた彼女のこと

泣きながら目を覚ました。

天井にはシャンデリアが煌々と輝いており、天井には美しい細工が施されている。

明らかにいつもの私の部屋ではない。起き上がれば、手触りの良いシーツが私を包んでいた。

ここは、どこだろう。見たこともない部屋。誰もいない。

突然、兵士たちに囲まれて、それから意識がなくなってしまったんだっけ。

部屋を見渡せば、金装飾をされた高価そうなソファにテーブル、ドレッサーが並んでおり一番奥には小さな扉があった。

急いでベッドを降りて、扉へ走りドアノブに手をかける。しかし、どんなにドアノブを回しても虚しい音が響くだけで扉は開いてくれなかった。

一体、何が起こったのかわからない。部屋から出れないということとは、私は監禁されているということなのだろうか。

いまいち現実感がないから困ってしまいが、私はこれからどうなるのか。

混乱しすぎて、頭は正常に回らないままよると、近くのソファに座った。

なにか、と思ってポケットを探ると紙切れが一枚。これは、たしかノア様から貰った魔法陣だ。

その確かな感触に、元の世界に帰るのだという現実をつきつけられた気がして思わずため息がもれた。

嬉しいという気持ちはもちろんある。

だけど、私は本当にこの世界から消えてしまいたいのか。もうジークに会うことがなくなってもよいのだろうか。

そうやって考え出すと、ほんとと後悔のような何かが私の胸を占めだす。

このままジークと二度と会えないなんて、そんなの、

「いやだ、あいたい、よ」

「だれに？」

いきなり声がして振り向くと、ジークが後ろに立っていた。

何も言えず驚いている私を見てにつこりと笑い、となりに座るジーク。

どうして、ここにいるのだろう。

「びつくりしているね。だけど、君をここに入れるように指示を出したのは俺だから当たり前だと思うよ」

そう言ってジークは手に持っていたティーセットをテーブルにおいて紅茶を入れた。

なんだ、こういう意味だろう。それは、もしかして。

「知っていた、の」

「うん。あのさ、ノアは俺の部下だよ。俺が知らないことなんてすと思う。あるわけがないよね」

困ったように笑いながら、紅茶を二人分入れるジーク。

表情もしゃべり方も変わらないはずなのに、ピリピリした何かが突き刺さってくるような雰囲気はいつもと違って、冷たさを感じる。

「はい」と、ニツコリと笑いながら紅茶を差し出すジーク。

恐る恐る受け取りながら、いつもと違う雰囲気に私はすっかり狼狽えている。

きつと、怒っているんだ。

今まで怒らせたことなんてなかったから、どうしたらいいのかわ

からないけど、ここは素直に謝るのが一番なのだろう。

そおつと顔を上げれば、絶対零度の笑顔が私を見つめていた。

「その…だ、黙っていてごめんなさい」

「うん」

ふう、とため息をついたジークは、真剣な表情になる。

「勝手に異世界への扉を開くのはいけないことだ。失敗したら死んでしまうくらい危険なんだ。だから、そんな危ないことはやめてほしい」

そんなことは知っている。一番にノア様から一晚中説明と説教されて嫌というほど思い知っている。

でも、ここで諦めたらもう道がない。ポケットの魔法陣をそつと触って私は覚悟をきめる。

「でも、私、もどりたいの」

「どうして？」

どうして、なんて言われてもなんて答えたら良いものか。
あなたが好きだからですよ、なんて言えるはずがない。

ごくり、と唾を飲んで私はジークとしつかりと見据える。

「やっぱり、この世界は私がすむ世界ではないと思う。読み書きもできない私なんて居ても居なくても変わらない」

「そんなことない。俺は、マナが居ないと寂しい」

優しい言葉に悲しげな顔。そんなジークを見て、泣きそうになりながらも、駄目だと心を強く持つ。

こうやって彼の優しい態度に喜びすがって居残ったとしても、この世界に居る限り私はジークとセリナ様が寄り添う光景を見続けなくてはならない。

そんな未来で、私はこの人を恨まないとはいえない。逆恨みだとしても、強い思いは時に凶器にすらなりえる。

もしかしたら、ジークを憎んでしまう日が来るかもしれない。

そんなのは絶対に嫌だ。ジークを憎んでしまつくらいならば、消えてしまった方がいい。

「ありがとう、嬉しい。私も、ジークと会えなくなるのは寂しいし、悲しいと思う。だけど、やっぱり私は戻りたい。」

じつと、ジークの瞳を見つめる。私の覚悟をしつかりと分かつてもらうために、私がどれだけ本気がって知ってもらうために。

「生まれた場所に帰って、家族とか友だちに会いたいの。ジークなら、わかってくれるよね。」

必死に縋るように言う私はずるいと思う。

この言い方ならば、優しいこの人は是としか言いようがない。

しばらく考えるようにして黙っていたジークは、ポツリとつぶやく。

「その会いたい人の中に、愛しいと思う人も含まれているの？」

「え？」

唐突な質問に言葉を失ってしまった。

私にとっての本当に愛しい人は、この世界にいるたった一人。その人以外に愛しいと思う人なんていない。

「…ちがうよ。それは、ちがう。」

「本当に？」

だって、私の好きな人は、目の前にいる王子様だけ。伝えられなくとも、それだけは揺るぎないことだ。

「うん、本当だよ。」

「そっか、わかった。…じゃあ、行くね。」

立ち上がって、ドアへと向かっていくジーク。急いで私も後を追う。

戻るために色々と準備もあるから、そろそろこの部屋から出して

もらいたい。

ジークがドアノブを回せば、ドアは簡単に開いた。さつきはびくともしなかった扉がすんなりと開くのを見て、なんだか不思議な気持ちになってしまった。

「あ、そうそう」

開きかけの扉を背に隠して、ジークは私の方を向く。

「マナは、魔法に関する法律違反で一週間くらい謹慎だから」
「え？」

さらっと大事なことを言い放ったジーク。

謹慎？一週間？それって、結構困るんだけど。

「それって、どうにかならないの？一週間は、ちょっと困るな。そんなに長い間仕事を離れるのも悪いし……」

異世界への召喚は、6日後の新月。真つ暗闇の中で行われる。

7日も拘束されてしまったは、私の計画はまた一年も延びることになる。

「うーん……、難しいけど、そうだな、5日くらいならできる、かも」

「えー？本当に……！すごい、ジークお願い、5日にして……」

犬のようにキャンキャンと飛び跳ねる私。

そんな私の頭を撫でながらよしよししてする光景は、犬と飼い主のようだろう。

「いいけど、俺のお願いも、聞いてくれる？」

「できる範囲ならば、がんばります……」

「よかった。じゃあ、5日後にお願いするね。それまでの間、毎日顔だすから」

そう言って、扉から出て行くジーク。

その背中を見送りながら、最後の時間を思っただけ切なくなつた。

4、意地の悪い彼について

落ちていく水の中、キラキラと金色の髪が光っている。
碧い瞳は悲しそうに歪み、必死に手が伸ばされる。

ごめんね。

私では、その手を掴めないの。
でも、泡になっても傍にいるから。

だから、どうか泣かないで。

ぱちつと目を開けると、いつもの天井でなくてビックリする。あ
あ、そうか私は今謹慎中の身だっけ。

むくりと体を起こす。さっきまで見ていた何か。
一体、なんの夢だろう。思い出そうとすると、苦しくて切なくて
涙が出そうになる。

うーん…と、この不思議な感じに戸惑っていると、後ろから声が
した。

「どうしたの？」

「きゃ！」

びっくりして振り向けば、笑顔のジークが居た。後ろのテーブル
には食事の用意がされている。

ああ、朝ごはんを持ってきてくれたのか。

「びっくりしたあ。ジーク、おはよー」

「うん、おはよう」

そう言っ、ジークは当たり前のようにキスをしようとするものだから、びっくりして飛びのいた。

「なななななに!?」

「挨拶だよ」

仕方ないなあとも言いたそうに私の頭を撫でるジーク。うう、起き掛けのごわごわ頭には、あまり触って欲しくないんだけど。

「あんまり心臓によくない挨拶だ、ね」

「そうかな、続けていれば慣れちゃうよ」

「慣れません!」

恐ろしいことをさらりと告げる王子様に私は思わず反論する。

昨日もそうだったけど、ジークと私の感覚は違っているのかもしれない。

それも、決定的に。

赤い顔を隠しながら、食事が整えられたテーブルへ向かう。

メイドの誰かが用意してくれたのだろうか。なんだか、いつもと並べ方が違う気がする。

「というか、ちょっと、これは、

「並べ方が、変だ…」

「ああ、やっぱり分かるんだ」

面白そうにニヤニヤしながらソファーに座るジーク。促されて私も隣に座る。

「いつもの通りにはいかないね」

「…もしかして、ジークがテーブルセットしたの?」

恐る恐る聞いてみれば、満面の笑みで頷くジーク。なんてことだ!

王子が、いやもうすぐ王になる人にテーブルセットをさせるなんて怒られちゃう。

「メイドさんたちをお願いすればいいでしょう」

「うーん、この部屋に俺以外はいれたくないから」

「じゃあ、私が用意したのに…」

「いや、マナのご飯を俺が用意したかったんだ」

一瞬、どこから反論したらよいのかわからなくなった。

王族としての自覚をしつかりと持つべきだし、私なんかには使わなくてもいいのに。

でも、嬉しそうなジークを見ると、そんな言葉は胸の中で消えてしまった。

「…ありがとう、ジーク」

「どういたしまして。マナのその言葉を聞けただけで、とても嬉しい」

私の心臓を壊しそうな優しく甘い言葉に、やっとの思いで小さく頷く。

なんて返事をしたらいいのかわからないから、必死で目の前のご飯に手を伸ばした。

はむはむと美味しい朝食を食べながら、私はふと気が付いたことをジークに聞いてみた。

「そういえば、ノア様は元気にしている…？」

私に協力するとか言いながら、しっかりとジークに情報を流していたノア様。

裏切ったという表現は正しくないだろう。ノア様の主は最初から最後まで王子であるジークであった。

だから、ノア様は己の立場からして正しいことをしていた。

ただ今だけは言わせて欲しい。

裏切り者め！！

「ちょっと謹慎してもらっている。けど、元々ノアは研究室に籠っていたから、いつもと変わらず実験三昧みたいだ。心配？」

「うん。私のわがままにつき合わせて、色々と迷惑をかけちゃったからね」

今回の事で宮廷魔道士長という地位を脅かすことになってしまったかもしれない。

もちろん、そのことを考えなかったわけでもないし、ノア様も分かっていたはずだ。

それでもやっぱり申し訳ないと思ってしまう。

「マナは優しいね。ノアなんてマナのことを気にもせず、実験ばかりしているよ」

「ううん、ノア様は優しいよ。無理を言った私に、一晩中お説教してくれるほど心配してくれたんだから」

一晩中お説教なんて、相手のことを少なからず思っていないわけじゃないことだ。

なんだかんだ言って私のお願いを聞いて、元の世界に戻る方法を考えてくれたノア様には感謝しなきゃいけない。

照れたように笑う私を見て、ジークは不機嫌そうにため息を一つ。
「でも、最終的にノアは君を裏切った。大切な君を切り捨てたんだ」

冷たく呟かれたその言葉に、私はなんだか悲しくなった。

ノア様にとつて、ジークはもつとも尊く大切な存在である。

それこそ、私なんかとは比べ物にならないほどに重要な人。だからノア様が私よりジークを選ぶなんて当たり前のことだ。

そんな当たり前のことをジークがわかっていてくれないなんて、なんだかノア様が可哀想に思えてしまった。

大切な思いが伝わらないのは切ないなと思うと同時に、どうしても気が付かないのってジークに対して憤りも感じる。

「ちがうよ、ノア様はジークを大切に思うからこそ、当たり前のこと

とをしたんだよ。」

思わず責めるような冷たい声色になって、はっとした。

一番悪い私がこんなことを言える立場ではない。

でも、ジークにはノア様の気持ち悪いほどの忠誠心をわかって欲しいのだ。

「本当に、マナは……」

クッと微笑むジークの笑みはいつもと違って歪んでいる。まるで、嫌なものを見ているかのような表情。

私のさっきの言い方で気分を悪くしてしまったのだろう。ジークのこんな表情は初めて見る。

いけない、すぐ謝らなくちゃ。

「あの……ごめん、なさい」

「なにが？」

いつもどおりの笑顔をつくったジークだけど、やっぱり目はどこか怖いまま。

どうしたら許してもらえるのだろうかと狼狽える私を見て、だんだん笑顔もなくなっていく。

そして、無表情に近い表情になったジークは、はあと溜息を一つ。「ねえ、それよりも、自分の心配をしてごらん。マナは罪を犯して『此処』に入っているんだよ。昨日、仕事がどうかいっていただけ、もうメイドの仕事はできないよ。」

ささやく様に呟かれた言葉は、私の心に重く沈んだ。

お城を出た後の生活。それを考えるのは正直、辛い。

私はここを出たら元の世界に帰るから、メイドの仕事がもうできないならそれで良い。

むしろ、引継ぎとかいろいろ面倒なことしなくてラッキーくらいだ。

だけど、ジークに会えなくなると思うと、やっぱり寂しくて悲し

くなってしまう自分がいる。

きつと、出会う前と同じ生活には、戻れないだろう。

「そうだね、同じ生活は送れないよね。…お城を離れてジークと会えなくなるのは、やっぱり寂しい」

思わず本音が零れて、ついでに涙も出そうになって急いでうつむいた。

そんな私の頭に手が触れる。優しく撫でてくれる手は、私を慰めてくれているようだ。

「…ごめん。ちよつと意地悪を言いすぎた。大丈夫、マナはいつでも俺に会えるよ」

顔を上げれば、申し訳なさそうに微笑むジーク。

いつも通りのその表情は、私をとても安心させると同時に、どうしようもなく泣き出したい気持ちにもさせた。

王子様の優しさは、いつも私を嬉しくさせて苦しめるんだ。

5、幸せな檻について

開かない部屋で過ごして、4日が経過しようとしていた。
この4日間でわかったことは色々ある。

たとえば、この部屋は「魔法」で保護されているらしく、主であるジーク以外の人間は入れないそうだ。

ジーク以外の人は絶対に入れないの？って聞いたら、誰か会いたい人でもいるの？ノアとか、って返してきたジーク。

表情は笑顔だったけど、何故だかすごく怖い目をしていたから、もうそれ以上は聞くことができなかった。

今回の私の罪に対しての刑罰は、ジークが全面的に面倒をみてくれることになったらしい。

牢であるこの部屋の管理や私への事情聴取など、戴冠式も近いのに色々よくしてくれるジークには申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

ジークじゃなくても良いと言ったのに「俺が嫌なの？」なんてションボリされれば、何も言えない。

「ひまーひまー」とベットに転がりながら、窓を見つめる。

窓枠に美しい細工がされた大きな窓は、この部屋にぴったりと調和している。

そこからは、城下町がよく見えた。今日は天気もよく、どこまでも空が青く澄んでいて綺麗。

だけど、この窓は実際の外と繋がっているとは限らないのだ。魔法でその景色を見せているだけかもしれない。

一度、窓を割ってみようとして色んなものをぶつけたけど、びくともしなかった。

その頑丈さから明らかに「魔法」が関わっていることがうかがい知れる。

ちなみに、その時のジークのすごく困った顔は今でも忘れられないトラウマだ。

今思い出しても胸が痛くなるほど悲しそうな顔だったなあ。

部屋には、お風呂やトイレがついていて日常生活には困らない。食事はジークが持ってくる以外は、気が付けば部屋に用意されているという感じだ。

最初は慣れなくてちょっと怖かったけど、慣れてしまえばとても便利。

だから、私はここ4日、ジーク以外の人と会っていない。

「ああ、もう、暇すぎてどうしたらいいの……」

もう、本当にやる事がなくて、退屈で仕方がない。

今までの私は、元の世界に戻るために色々と動いてきた。

けど、魔法陣が完成した今、私は何をしたらいいのかわからなくなっている。

文字を読めない私は本も読めない。裁縫なんて時間つぶしでやるには苦しすぎる。

思えば、私には趣味らしい趣味もないんだ。

クローゼットの中には数えきれないほどのドレス。テーブルには、常に数種類のお菓子。

全てジークが持ってきてくれたもの。だけど、すぐに飽きてしまった。

お菓子は色とりどりで綺麗なんだけど、一人で食べても美味しくない。

ドレスは、一人で着るのがとても難しいものばかりで、ストレスが溜まってしまう。

それでもドレスは、せつかく持つてきてくれたんだから、となんとか頑張つて一回だけ着てみた。

馬子にも衣装を体現した私の姿を見て、嬉しそうに笑ってくれたジーク。

次はウエディングドレスを俺のために着て、なんてとろけそうな顔で言われた時には、破壊力がすごすぎて息の仕方を忘れそうになった。まさに、究極の殺し文句。

あんな恥ずかしいセリフを平気で言えるジークは、ホストにだってなれちゃうだろう。

ああ、なんかめっちゃめっちゃ貢いでしまいそうだよ。

恥ずかしかったといえば、ドレスの後ろの紐を綺麗に結べなかったのを、一つ一つ丁寧に結んでもらったのも恥ずかしかった。

ちらちらと指先が背中に触れ、その度にとてもドキドキしてしまったのを覚えている。

なかなか結んでくなくて、逆に脱がせようとするジークに何度も「こら！」って怒って、その度に軽くかわされていたんだっけ。

最初の日に言ったように、ジークは毎日会いに来てくれた。

戴冠式も近いから忙しいだろうに、疲れた様子もなくやってきては私の話相手になってくれる。

彼のくれる優しく甘い時間の中では、元の世界に戻るという目的を忘れてしまいそうになる。

そういえば、今日はまだジークに会っていない。

どうしているのかな、なんて思いながら今までの会話を思い出す。昔は弱虫で泣き虫だったことや、魔法が結構得意なこと。兄弟は弟が一人で仲は、まあまあ良いとか。

そんな他愛のないことを思い出しては、うふふと思わず笑ってしまふほど幸せな気持ちになる。

大切な、大切な宝物を一つ一つしまっている気分だ。

とても素敵な最後の思い出。

この思い出だけで、私はこれからも生きていけるだろう。

たまらなく幸せなこの時間は、一生の宝物だ。
これからも、ずっと。

6、開いてしまった扉について

それは、世界の掟。

この世界の神が定めた絶対の理。
世界の守りであり、同時に呪いでもあるソレからは、誰も逃げられないと

悲しそうな瞳で、魔女は語った。

幸せな記憶を反芻しながら、私は今日はまだジークが来ないなあ
と目を閉じる。

その時、ザアッと雑音が耳に届いた。
テレビの砂嵐のような音。だけど、この部屋にテレビなんてあるはずがない。

部屋中を見渡しても異変なんてあるはずもなく、首をかしげると
また雑音がした。

「お…おい…きこ…え…へんじを…」

聞き覚えのある声。この声は、もしかして。
私は急いで、うる覚えながら手で印を結んだ。そして、必死で音に集中する。

これは確か、ずっと前にノア様に教えてもらった「声送り」とい

う魔法の一種だ。

私みたいに魔力がほとんど無い者でも、印を結んで集中すれば相手の声を受け取ることができるという簡単な魔法。

かすかな音に集中していくと、雑音はだんだん消えていき相手の声がよく聞こえてくるようになってきた。

『おい、聞こえたら返事をしろ。ただし、近くに王子がいない場合のみだ。近くに王子がいるならば、絶対に返事をするな。応答もいらん!!』

「大丈夫ですよ、ノア様。ジークはいません」

私の応答に驚いたのか、「うお」なんて情けない声を出している。そんな声が面白くて思わず笑ってしまった。

『お前：今の状態がわかってしているのか。よく笑ってられるものだな』

「だって、ノア様がそんな声だすなんて、めったにないですよね。だから、驚いちゃって、つい」

はあ、と大きく溜息をつかれたのが聞こえる。

『元気そうだな。お前のおかげでこちらは軟禁状態なんだぞ』

「それは、すみませんでした。でも、ノア様だってジークに全て教えていたんでしょ」

責めるように言い返せば、「は？」と困惑したような声が返ってきた。

『王子が、そうおっしゃったのか』

「ええ、ジークがしっかりと教えてくれました!!」

どうだ!とばかりに言えば、しばらく無言が続いた。なんだ不気味な無言だなあ。

『くそ。お前さえ、覚えていれば…』

悲痛な響きを含んだ言葉に、私は何も答えることができない。

「それは、いったいどういう意味で」

言葉を続けようとしてズキンと軽い頭痛。それと共に、水中の映像が頭に浮かぶ。

ふわふわと漂う金色の光

泡が浮かぶ中、碧い瞳はやわらかに微笑んで

伸ばされる手は、しっかりと私の手を握る。

それは、

それは愛しい――、

『思い出せとはいわん。ソレは、世界を守るための秩序であり呪いだ。誰も逃れられん』

「呪い…ですか？」

呪いとは、束縛であり制約のようなものであると聞いている。

そんな物騒なものを、私はかけられた覚えはないのだけど。

『お前は、この世界に来るのは初めてじゃ…ない…ぞ』

「え？ちよつと、それってどういう、あ、ノア様！！ノア様！！」

雑音がひどくなり声が消される。そのうちに、いくら呼びかけても返事はなくなってしまった。

こんなこと今までなかった。もしかしたら、この部屋のせいなのかもしれない。

私は今、罰を受けている身である。そして、この部屋はどんなに住み心地がよくとも牢なのだ。

声送りを防ぐ結果があつたとしてもおかしくはない。

「初めてじゃないって、言っただわよね…」

ノア様の言葉に、私は狼狽えて部屋中をウロウロする。
初めてじゃない？ということは、前に来ている、と？
そんなはずはない。私は初めてこの国に来たはずだ。
だって、来たことがあるなら覚えているだろう。
私はこのゼガールをラカを初めて見た。
ジークにも初めて会った。

……あれ？

初めて会った時、城の噴水の深いところからジークをなんとか引っばって地上に上がった。

その時、ジークはなんて言って私を迎えてくれた？

「大丈夫ですか？ てか、ここどこなの？私、水たまりに落ちただけど！」

「ごほつごほ…ありが、とう」

「すごい、あなた外人さんなのに日本語わかるの。あ、ちょっと無理に起きたら、」

「やっと…だ。…もう、はなさ、ない」

「ちよつと、何言って、あああ倒れたっ！」

その時は、誰かと間違っているんだと思った。

切なさや愛おしさの入り混じった表情で私の手をつかむジークの態度は、初対面の私に対するものではなかったから。

でも、違ったとしたら。もしも、前に会っていたとしたら。

だとしたら、ジークの言葉もわかる気がする。

でも、私たちは前に会っているのだろうか？

ジークに会っていたとしたら忘れられるはずなんてない。

うーん、うーん、と悩んでいると扉が開く音がした。

この部屋に入れるのはただ一人だけであるから、ジークが来たんだ！と振り返ると、そこには、黒ずくめの少女が立っていた。

全身を黒で埋め尽くした少女は、印象的な真紅の瞳に美しい容姿をしていた。

黒ずくめでさえなければ、どこかの国のお姫様のような気品を漂わせた少女。

そんな少女が、私を見ると表情を歪ませた。

そして、我慢ならないというように大声で叫んだ。

「見つけた！！もう、本当にあの馬鹿は変わってないんだから！！」

「

少女は、全身に怒気を孕みながら部屋に入ってきてソファにドスンと座った。

そんな少女の勢いに押された私は、メイドとしてのくせで紅茶を入れようと食器棚に走ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1848t/>

泡になっても傍にいて

2011年11月14日23時31分発行